

顕浄土真実行文類二(二)

高田短期大学学長 栗原 廣海

一、大行とは何か

「大行」について、聖人は「無碍光如来の名を称するなり」と言われます。それは言うまでもなく「南無阿弥陀仏の名号を称すること」であるわけですが、ではなぜ、「南無阿弥陀仏を称するなり」と言われなかったのでしょうか。

前回も述べましたように、善導大師に導かれて説かれた法然上人の念仏往生の教えを、親鸞聖人は弥陀回向の大行・大信として展開していかれたわけですが、その展開の根拠となるのが、曇鸞大師の『浄土論註』の教説でした。「大行はすなわち無碍光如来の名を称するなり」も、この『浄土論註』によられたものであると考えられています。

「無碍光如来の名を称するなり」と言われたと考えられるのです。

ではこの積の言葉をもって大行を説明する理由はどこにあるのでしょうか。それは、右に引用した『浄土論』の「かの如来の光明智相のごとく、かの名義のごとく、如実に修行して相応せんと欲するがゆえなり」への曇鸞大師の『浄土論註』における積をとおして、「無碍光如来の名号」が智慧の光明として何ものにもさまたげられることなからゆる世界を照らし、人々の心の闇である無明を破って成仏の因となり、人々の往生成仏への願いを満たすはたらきをすることが明らかにされ、その称名が、疑いのない真実信心としての「一心」をそなえた他力の称名であることが明らかにされているからです。

「南無阿弥陀仏を称する」ということであれば、この言葉は『観無量寿経』の下品下生の所説のな

『浄土論註』は、インドの天親菩薩が著された『無量寿経優婆塞願生偈』（一般には『浄土論』を中国の曇鸞大師が註釈された書物です。『浄土論』には、浄土往生の行として、礼拝・讚嘆・作願・観察・回向の五念門が説かれています、その第二の讚嘆門について、

いかに讚嘆する。口業をもって讚嘆したてまつる。かの如来の名を称するに、かの如来の光明智相のごとく、かの名義のごとく、如実に修行して相応せんと欲するがゆえなり。

と言われています。曇鸞大師はこの文の中の「かの如来の名を称する」について、『浄土論註』の中で、

「かの如来の名を称す」とは、いわく、無碍光如来の名を称するなり。

と、積しておられます。この積によって、大行をかにも説かれています。『観無量寿経』は、隠された真意からすれば真実の教であるが、説かれている表面上の文言に従うならば、自力を説く方便の教であるとされたのが親鸞聖人でした。ですから、大行を「南無阿弥陀仏を称する」ことであるとすれば、大行が自力の称名になりかねないという一面をもつこととなります。そこで、「大行」とは、「一心」、すなわち真実信心が口業としてはたらいた、如来の本願力回向の、他力の称名であることをあきらかにするために、曇鸞大師が言われた『浄土論註』の「無碍光如来の名を称するなり」の言葉で説明されたのです。

続いて次のように言われます。

この行はすなわちこれもろもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。ゆえに大行と名づく。

(名号を称える大行には、あらゆる善がおさま
り、一切の功德がそなわっていて、速やかに
に功德を衆生に満足せしめる、真如一実の、
海のように深く広大な功德が満ち満ちてい
る。だから大行と名づけられるのである)

『無量寿経』によれば、阿弥陀仏は仏になら
る前、世自在王仏のもとであらゆる人々を救わ
んがために出家し、法蔵菩薩となって五劫の間思惟
して四十八願をおこし、兆載永劫の修行の後、
誓願を成就して阿弥陀仏となり、現在は建立され
た西方極楽で説法されているわけですが、あらゆる
人々を救わずにはおかないとの誓願を成就する
にいたる兆載永劫の修行の完成によって得られた
徳は、私たちには計り知れない、不可称・不可説・
不可思議の至徳です。名号にはこの徳が円かに欠
け目なく具わっていますから、その名号を称える
称名には、阿弥陀仏が成就された善行と功德のす

また選択称名の願と名づくべきなり。

(ところで、この行は大悲の願から出てき
たものである。この願を諸仏称揚の願と名
づけ、また諸仏称名の願と名づけ、また諸
仏咨嗟の願と名づける。また、往相回向の
願とも、選択称名の願とも名づけることが
できる)

称名という大行が大悲の願から出てきたもので
あるということは、つまり、称名は阿弥陀仏の大
悲心から回向された行であって、凡夫が自らの意
思で行う自力の行ではないことをあらわすとも
に、その称名は第十七願によってこの私に届けら
れていることが示されています。

第十七願は、

たといわれ仏を得んに、十方世界の無量の
諸仏、ことごとく咨嗟してわが名を称せず
は、正覚を取らじ。

べてが具わり、称えているその瞬間に、仏になる
ためのあらゆる功德が円満するということです。そ
の徳は海のように深く広大なさとりのものもの徳
ですから、「真如一実の功德宝海」と言われるの
です。このように、さとりのものものこの上ない
功德の宝である行が、浄土往生の行として阿弥陀
仏から回向されているのです。称えるのは私です
が、それは、阿弥陀仏の私を往生せしめるはたら
きが私の口に称名となってあらわたるものです。称
名はこのような、阿弥陀仏の往相回向の行である
から、「大行」と言われているのです。

二、大悲の願

次のように続きます。

しかるにこの行は大悲の願より出でたり。
すなわちこれ諸仏称揚の願と名づく、また
諸仏称名の願と名づく、また諸仏咨嗟の願
と名づく、また往相回向の願と名づくべし、

(私が仏になるとき、あらゆる世界の数限
りない仏がたが、みな私の名をほめたたえ
ないようなら、私は決してさとりをひらき
ません)

と誓われています。阿弥陀仏は、第十八願に誓わ
れた念仏の、その体である「南無阿弥陀仏」の名
号の徳を、あらゆる世界の数限りない仏がたにほ
めたたえさせ、それをすべての人々に聞かせるこ
とによって疑心を捨てさせ、称名こそが浄土に往
生できる間違いない道であるとの信を開かせよう
とされているのです。

「称揚」も「称名」も「咨嗟」も、ともにほめ
たたえるという意味です。諸仏にほめられ、称え
られていく大行は、人々を浄土に往生させる回向
のはたらきをしますから、「往相回向の願」とも
言われ、阿弥陀仏によって選ばれた名号を諸仏が
称え、ほめたたえていることが、「選択称名の願」

という願名となっています。